「エンディミオン」における映像のあり方

永井豊実

序

「エンディミオン」において美の姿を捉えたものは何処にあるのだろうか，と探ってみるうちに，それは自然の姿を捉えた映像の世界にあると思えた。そこには既に人間の心の中で濾過された映像があって，その映像を如何に表わしているかを探っていってみるのがこの小論である。

I

「美しいものは永遠の喜びである」(A thing of beauty is a joy for ever.) と言って始まるこの長編詩「エンディミオン」"Endymion" は，まさに月への賛美の詩であると言える。美しいもののうちでも特に完成された美しさを備えたものが月であるのだという。そこで，「美しいものは永遠の喜びである」という意味を追ってこの詩を読んでいかなければならない。しかしキーツのいう美 Beauty という言葉にはあまりにも濃縮された意味が含まれているのでその意味を容易に把握することができない。例えば，先程の "A thing of beauty is a joy for ever"[1] とか，"Beauty is truth, truth beauty"[2]「美に真にして，真は美なり」とか，"She dwells beauty—Beauty that must die"[3]「憂愁（君の恋人）は美と共にある—死なねばならぬ美と共に」とかいった一連の美を抽出して結晶化したような言葉があちらこちらに散りばめられている。それぞれについてキーツの美意識の発展と共に考え，理解していかなければならない大

きな問題である。

1817年春から秋にかけての22才の作 "Endymion" は，その後の作品や Ode 群でみごとに花を咲かす若い芽を散在させている。キーツの美に対する把握の仕方や認識は彼の手紙から，あるいはこの詩の幸福論 Wherein lies happiness (BK. I, l, 777) からも伺い知ることができる。これについては既に小川和夫教授の "Wherein Lies Happiness"[4] に詳しく論究されているので，あえてここで詳しく述べる必要はない。しかし都合上簡単にその幸福論を要約しておきたい。（以下〈 〉内の訳文，訳語は小川教授からの引用)。

幸福はどこにあるのか[5]，という問題の提起に，それは〈応えようとするわれらの心を招いて神々しいまでの繫情(けいじょう)に，精粋との繫情に導くものにあるのだ〉(In that which becks/Our ready minds to fellowship divine,/A fellowship with essence;) (ll. 777—9) とまず答えている。〔ここで〈精粋との繫情〉"fellowship with essence" と（後にでてくる）〈一種の合体状態〉"a sort of oneness" とは "blending", "interknitting", "entanglement" などとともに，同種の経験を異った名で呼びかえられる〉[6]。〕そして幸福の諸段階を三つあげている。第一段階は視覚，触覚，臭覚による自然美の享楽にあり (I. ll. 781—6)，第二段階は聴覚的に過去の詩歌に謡われた歌を回想することにあり (I. ll. 787—97)，そして第三段階は愛によって他に合一することにある (I. ll. 793—834)[7] とまとめあげることができる。そして具体的に言うと，第一段階では視覚によって，〈天に澄める森厳さに目を向けよ〉Behold/The clear religion of heaven! (ll. 780—1) と（〈具体的には余計なものを含まぬ純粋なエセンスとしての月 Moon を〉）言っている。また〈先細な指にバラの花びらを巻いて唇にあててそれをなだめしずめる〉Fold/A rose leaf round the finger's taperness,/And soothe thy lips: (ll. 781—3) ことを〈触覚，臭覚〉的から言っている。第二段階では，〈いにしえの歌はおぼろなる忘却の奥城(おくつき)より目覚め，忘れられた小唄は父なる作者たちの墓の上でふたたび吐息をもらす〉Then old songs waken from enclouded tombs;/Old ditties sigh above their father's grave; (ll. 787—8) 等を〈聴覚〉的に挙げている。これは心の内のくりかえしによってものはより純化され，回想された詩歌は更に美しくなる

というのである。更に第三段階では，〈それよりもわれらの心を豊かに捉えるもの，はるかに強くわれらの自己を虚しくする魅惑が数々存在する〉But there are/Richer entanglements, enthralments far/More self-destroying, (ll. 797—9) のであって，〈それらは段階を追ってわれらを導き，ついには衝迫力の核心に達する〉leading, by degrees,/To the chief intensity: (ll. 799—800)。そしてそれに達するものの内で最高のものは愛と友情だという (the crown of these/Is made of love and friendship,) (ll. 800—801)。その二つのうちで友情よりも愛の方が更に上にあって，愛の霊液が眼に流れこむと，〈新しい感覚を生み，われらは驚き苛らだってくるが，やがてその光輝のうちに溶け込み，われらはまじり，混じて，その一部になってしまう〉genders a novel sense,/At which we start and fret; till in the end,/Melting into its radiance, we blend,/Mingle, and so become a part of it, (ll. 808—811) のである。つまり愛が最高に〈自己滅却〉(self-destroying)（他者のうちに自己を投入すること）によって，より対象に溶融し，混合し，そのものとなりうることができるといってよい。つまり intensity〈衝迫力〉が自然なものより，より大きく働きかけることとなるのである。以上を簡潔にまとめあげた言葉として，ベイリー宛の手紙の言葉から引用するならば，「愛も情念もすべて〈昇華されて熾烈になると精粋としての美を創りだす〉」(cf "...I have the same Idea of all our Passions as of Love they are all in their sublime, creative of essential beauty—") (from To Benjamin Bailey, 22 November 1817) ということになるであろう。

以上幸福論のくだりを私なりにまとめてみた。結局は主客合一(a sort of oneness) によって，対象の本質あるいは美を，つまり essence（エセンス）を把握することができるのである。その際に必要なのは，対象からの働きかけと，自らの働きかけとのどちらかからも intensity〈衝迫力〉の強さが必要になってくると言えるのである。

II

ところで"Endymion"がallegorical(寓意的)であるかないかという問題について，メイヘッド(Mayhead)氏がこう言っている。「'寓意的'な意義が重要ではないと言うのではない。それどころか，"エンディミオン"は意識的に作り出された寓話なのだとして見るのは恐らく間違っているけれども，この詩の幾つかの個所のその底に表われた意味(を見る方)が重要である[8)]」といっている。意識的に作られた寓話ではない。その底に現われた意味を汲みとることが大切だということは，エンディミオンが月の女神シンシアCynthiaを恋し捜し求めるという愛のテーマと，その中に自ずとキーツの美の探究のあり方とが相互作用的に働いているという意味で解釈してよいであろう。そこでここでは詩の幾つかを拾いあげて，幸福論で言っている対象との合一がどういう過程を経て，どういう様に表わされているか，を探ってみることにしたい。

キーツは物をじっと見ることが好きである。この詩の中に幾つか凝視る場面が出てくる。例えば川端の柳が辛抱強く川の流れを見ているところがある。

And as a willow keeps
A patient watch over the stream that creeps
Windingly by it, (I. ll. 446—8)

川端柳が，辛抱づよく
曲がりくねって流れる水の
川面の上をみつめているように。 (拙訳，以下同じ)

あるいは空を流れる雲が水鏡に写って消えていくのをじっと見ている描写がある。

I sat contemplating the figures wild
Of o'er-head clouds melting the mirror through.
(I. ll. 886—7)

私は坐ってじっと見ていた，無数に浮かぶ
頭上の雲の水の鏡に溶け入る様を。

こうしたイメージが熟した果実のように実ったのが，後の "To Autumn"「秋に寄せる」にでてくる光景であろう。

And somtimes like a gleaner thou dost keep
Steady thy laden across a brook;
Or by a cyder-press, with patient look,
Thou watchest the last oozings hours by hours.
(To Autumn II. ll. 8—11)

そして時々、落穂拾いの人ごとく，お前はじっと
重い頭を小川の上に垂れていた。
またある時はリンゴ絞りの器械のそばで，辛抱づよい顔つきで，
幾時間ともなくにじみ出る最後の雫を見つめていた。

じっと辛抱づよく凝視(みつめ)るということ，keep a patient watch とか，contemplate とか，with patient look とか，watch the last oozings hours by hours とかいった言葉は，幾時間も幾時間も時間が継続していくことによっていつか永劫的になるることで，永続的に水が流れ，雲が流れ，雫が垂れ，あるいは想いも流れていっても，じっと一点を凝視ていることによって，その全体の景色が静止して一幅の田園風景 (Pastoral) の写生画になって映像づけられることが大切なのである。"Ode on a Grecian Urn"「ギリシャの壺の賦」の中でも凍結された絵の中に永遠の動きを見い出しているが，それと逆の作用を行なっている。そして凝視(みつめ)ることによって，intensity が徐々に昂まり，〈自己滅却〉(対象に自己を投入すること) によって，あるいは深い洞察力によって，対象に入り込むことができるようになるのである。

想像力については，定義的な言葉として，ベイリー氏 (Benjamin Bailey) に宛てた 1817年11月 22 日付のキーツの手紙に，"What the imagination seizes as Beauty must be truth—whether it existed before or not—...." といった言葉が有名である。〈美というものが前にすでに存在していても存在していなくても，想像力が美として捕えるものは真でなければならぬ〉と言う想像力の真の機能について述べているが，ここでその想像力の働き方をまず見てみること

にする。想像力は精神の収斂によって，ものを深く洞察していく力であると言った。それをキーツは深い洞窟に入るように譬えている。

例えば，エンディミオンが月の女神シンシアの夢を見て以来，傷心の思いでいた時金色の蝶が現われて，泉のほとりに誘ってくれた。そして泉の水面をじっと見ている時に，地下の深い洞窟から地下宮殿への誘いを受ける個所が出てくる。

'Descend,
Young mountaineer! descend where alleys bend
Into the sparry hollows of the world!
Oft hast thou seen bolts of the thunder hurl'd
As from thy threshold; day by day hast been
A little lower than the chilly sheen
Of icy pinnacles, and dipp'st thine arms
Into the deadening ether that still charms
Their marble being: now, as deep profound
As those are high, descend! He ne'er is crown'd
With immortality, who fears to follow
Where airy voices lead: so through the hollow,
The silent mysteries of earth, descend!'
(II. ll. 202—214)

降りてゆけ
若い牧人〔エンディミオン〕！　降りてゆけ，この世のきらめく
ヘゲ石の洞窟さ中に通ずる道を！
かってしばしば見た電光
お前の戸口で放たれた，そんな風（に降りてゆけ）。
氷の尖塔冷たく輝き，それより日ごとにいくらか劣れども
お前の腕を浸していった
感覚麻卑さすエーテルに，大理石なる白き腕
いつもながらに魅するもの。今こそ降りよ深々と
高きに行くと同じごと
天なる声の導く方についてゆけぬと恐れる者は
不滅の王冠頂(いただ)けぬ。洞(うつろ)の中を通りぬけ，
地中の黙する神秘の中に，さあ降りてゆけ！

これは正に沈黙する神秘の中に身を躍らせて，想像の世界に飛び込んでいくことである。電光が火花を放つように素速く，真白い腕がエーテルに魅せられて，その腕を浸してさらに白くするように，すっかり感覚を失って溶かされてしまうように，深く深く降りてゆくことになるのである。不滅の王冠を得るには地球の神秘を探っていかねばならない。これと全く似たような表現にシェリー (Shelley) の "Prometheus Unbound"「プロメシュース解縛」にも出てきている「深淵への招待」(Invitation to the Prfoound) と称されて謡われている個所があるので参考に挙げてみる。これは1819年3月から4月に Scene III が書かれているので，キーツの方が1817年春から11月28日迄であるから1年半程遅れてシェリーは書いている。シェリーもキーツも共に想像力の重要さを説いているので，同じような洞察のあり方を追求しているといえよう。

To the deep, to the deep,
Down, down!
Through the shade of sleep,
Through the cloudy strife
Of Death and of Life;
Through the veil and the bar
Of things which seem and are
Even to the steps of the remotest throne,
Down, down!

. . . . . .

We have bound thee, we guide thee;
Down, down!
With the bright form beside thee;
Resist not the weakness,
Such strength is in meekness
That the Eternal, the Immortal,
Must unloose through life's portal
The snake-like Doom coiled underneath his throne
By that alone.

深い所へ，深いところへ
　降りて行け，降りて行け！
眠りの蔭を通りすぎ，
生と死との争いの
雲間の中を通りすぎ，
思える物やある物の
被いや格子を通り抜け
はるかに遠い玉席のその階段(きざはし)まで
　も降りて行け，降りて行け！
・・・〔2・3・4連略〕・・・
われらはお前を引きつけた。われらはお前を案内する。
　降りて行け，降りて行け！
お前の側の輝く人パンシャと共に。
弱き心に抗らうな，
柔和な心の内にこそ，ただそれのみだけによってこそ，
永遠なるもの，不死なるもの〔デモゴーゴン〕が
おのが玉座でとぐろまく蛇のようなる運命を
命の戸口で解き放つ。

どちらも同じように「不滅なるもの」"Immortality", "the Immortal" を得ようとして神秘の世界を探っていく。〈想像力が美として捕えたものが真でなければならぬ〉ということの意は，美を追求していって得たもの Immortality であるからで，真として不変性を持つことになるといえる。"A thing of beauty is a joy for ever" という言葉においても同じく，美しいものから intensity を受けて，そして自らも想像力によって対象と合一した時に，始めて美の本質 essence を極められることができ，不滅性を得ることができるので，美しいものが永遠の喜びとなってくるのであると言える。もう一つ想像力の働きかけとして神秘の糸を手繰っていくところがある。

; first undo
This tangled thread, and wind it to a clue.
Ah, gentle! 'tis as spider's skein;
And shouldst thou break it—What, is it done so clean?
A power overshadows thee! O, brave!

The spite of hell is tumbling to its grave.
Here is a shell; 'tis pearly blank to me,
Nor mark'd with any sign or charactery—
Canst thou read aught? O read for pity's sake!
(III. ll. 755—763)

まずは
もつれた糸を解きほぐせ，それから巻いて糸玉に，
あー，そっと！　蜘蛛のカセ程弱いから，
万が一にも切ったなら—なんと、上手にできたじゃないか。
お前に神の加護がある！　おー，すばらしい！
地獄の悪意が転がって，地獄の墓に落ちてゆく。
ほうここに貝がある。わしには真珠のように真白さ，
何にも印も文字もない—。
お前は何か読めるかい。ああ後生だから読んでくれ！

対象の複雑に縺(もつ)れた糸をそっと解きほぐしていく時，「蜘蛛のカセ程弱いから」"'tis as weak as spider's skein" という言葉はまさにその切れやすい想像の糸をみごとに象徴しているといえる。想像力は切れやすい。一旦切ってしまったら仲々切れた糸口を捜し出せない。対象の essence に向って神秘の糸を解きほぐしていきながら，それを糸玉に巻きあげていく作業こそ，繊細な集中力のいる仕事である。ここで見方を逆にして見るならば，想像力の働きで蜘蛛の糸のごとく，縺れた糸を解きほぐし，それを糸玉にするイメージや，あの蜘蛛が巣を張っている場面が浮び上ることこそ，まさに本質をとらえた描写であるといえる。ついでに蜘蛛の巣の映像として浮びあがる描写がある。

The Morphean fount
Of that fine element that visions, dreams,
And fitful whims of sleep are made of, streams
Into its airy channels with so subtle,
So thin a breathing, not the spider's shuttle,
Circled a million times within the space
Of a swallow's nest-door, could delay a trace.
A tinting of its quality: (I. ll. 747—754)

幻だとか夢だとか，眠りが生んだ発作的な気まぐれは，
夢の神様モーフュースの泉は微妙な要素にして
かすかに，そっと息づいて空の水路に流れ込む，
燕の巣口の空間で百万回も廻転する
蜘蛛の梭(ひ)でさえとめられぬ，
要素の動きや色合いを。

燕の巣の入口で，そのわずかな空間に何万回となく蜘蛛の梭(ひ)をすべらせている蜘蛛の巣と軒の燕の巣との光景を鮮やかに浮び上らせている。映像(イメージ)をつくりあげる描写こそ，美の本質を摑んでいる言葉とも言える。先程の詩で，ある老人が真珠のように真白な貝からは何も読みとることができないと言っていた。真白いその奥に書かれている言葉を読みとることこそが，まさにその奥の奥迄透視して言葉を見つけ出さねばならない作業なのである。「お前は何か読めるかい」は immagination（想像力）や〈衝迫力〉を覚える力があるかいと聞いているのも同じである。

そこで詩人は神秘の扉を開いて，魔法の奥義を究めていかねばならぬ。

If he utterly
Scans all the depths of magic, and expounds
The meanings of all motions, shapes and sounds:
If he explores all forms and substances
Straight homeward to their symbol-essences;
He shall not die. Moreover, and in chief,
He must pursue this task of joy and grief
Most piously; (III. ll. 696—703)

もし彼が魔法の奥義のあらゆるものをすっかり究めてしまうなら，
動きや形や響きなど全ての意味を拡大するならば，
もし彼が，あらゆる姿や本質などを探究し
象徴の奥のエセンスに真直ぐ道を進むなら，
彼は死ぬことないだろう。その上更に主なることは
喜び悲しみ，これこそ仕事，心を込めて追わねばならぬ。

自然のあらゆる形態，動き，響きなどから強い intensity〈衝迫力〉を得て，そ

の秘密を探る時，そして表われた美の表面の姿やその本質を探っていって，symbol-essence，象徴として表われているそのものの精粋に真直ぐに邁進するならば，不滅なものImmortalityを得ることができるであろう。しかしキーツはここで，更に重要なこととして，詩人の本分は喜びや悲しみを追求することにあるのだ，と言っている。つまり自然のみならず，人の心の奥底迄その想いを追求していくことこそが，重要な仕事であるといっている。この詩においてキーツはまだ美しいものは純粋に喜びであった。しかし，一年後には悲しみの極みを己が身に見い出している。それは後の作品に譲ることにしよう。

Ⅲ

物の本質を追求していく内に，結局人の喜びや悲しみを見い出すことになる。物のessence（エセンス）は混沌の中から抽出化された〈精粋〉であるとするならば，その〈精粋〉は人間の心の喜びや悲しみのエセンスでもあろう。「幸福論」でいう自然や芸術が人の心に訴えるものは，そのもののもつintensityであって，エセンスはこちらからも働きかけねば得られないものである。想像力をもって物の本質に迫っていかなければならないということは，こちらの全的な生き方を投入し，参入しなければならないということである。逆に見るならば，自分の内にこそ，その対象を見ながら，その対象の前における自己本来の自由なる生を自覚すること[9]になるのと変りない。結局対象と自己との作用によって，喜悲しみを対象の内に見い出すことにもなるのである。「幸福論」で言っているびや愛の最高位も，愛の本質が喜びも悲しみも対象と共にすることから依ってくるものだと言えよう。対象と合一した世界において喜びを見い出している時，即ちその世界を生全体として捉えている中で，特にキーツの特徴的なものが，感覚の世界に訴えているものこそ優れていると言える。視覚と聴覚とが特に鮮明に描き出されているので，そうした点を捉えながら美の姿を見ていきたい。

エンディミオンは，夢の中で雲間からのぞく月を見る。そしてその美しさにすっかり魅せられてしまって月はいつしか月の女神シンシア（Cynthia）となって現われてくる。それはまるでヴィーナスの誕生を思わせる以上のものだとい

って賛美している。ここ (I. ll. 608—32. 注参照)[10] においては，キーツの視覚的イメージが実によく出ている。月の象徴シンシアを描くに，髪は黄金色 (golden hair) に輝き，まさに西日にうなだれる黄金(こがね)の燕麦 (oat-sheave) 以上であり，耳は pearl-round で，脚は Venus の脚の白さよりも whitly sweet であって，blue のスカーフのたなびく様は濃紺の blue-bell の花壇に，恐らく赤や白 (vermeil and white) の daisy を散りばめたごとくに輝いているといっているのである。月の美しさを美しい女性として譬えて，その女性を追っていくのが，この "Endymion" だが，まさに月を女性として象徴し，その美しさを捉えようとしている個所である。エンディミオンは月の女神シンシアの「優しい愛情の籠った目差しの金色の泉から，生命の水を飲みほす為」(To take in draughts of life from the gold fount/Of kind and passionate looks;) (I. ll. 655—7) に生き，彼女との合体に向って月の女神を追い求めていったとも言える。この詩においてシンシアの賛美は月への賛美であり，特に今挙げた個所 (I. ll. 608—32) は月をみごとに象徴化して捉えたところと言える。またほかに月の光が波間に遊ぶ描写がある。

Or what a thing is love! 'Tis She, but lo!
How chang'd, how full of ache, how gone in woe!
She dies at the thinnest cloud; her loveliness
Is wan on Neptune's blue: yet there's a stress
Of love-spangles, just off yon cape of trees,
Dancing upon the waves, as if to please
The curly foam with amorous influence.
(III. ll. 79—85)

あるいは恋とは何なのか！ それは月の女神シンシアだ，だが見よ，
すっかり変ってしまっている。苦痛に満ちて，悲痛のきわみ，
薄雲奥に隠れてしまう。だがその愛らしい美によって
ネプチューンの青き海のその上までも青白い。ほら激しい，
恋のきらめきが，向うの木々の岬まで
波間に踊り光っている。あたかも
恋の働きで捲毛のしぶきが喜ぶように

恋にやつれたように青ざめた月の光が，薄い雲を通して波間にきらめき躍っていて，捲毛のような白い波しぶきと共にたわむれているのが目に浮かぶ。月の光の青白さと海の青さと白い波とが視覚的に夜の海をまざまざと映し出している。更に月の光が最後にエンディミオンを求めて海中深く光をさすのも，印象的に夜の海の透徹した水の美しさを描き出している。

O winged Chieftain! thou has sent
A moon-beam to the deep, deep water-world,
To find Endymion. (III. ll. 100—102)

おー翼あるキューピッド，
月の光を深海に，深く深くさし入れた
エンディミオンを捜すため。

音楽的にはドビッシーとかベートーベンの「月の光」を響かせると同じように，詩の中の言葉のイメージとしても月夜の海の淡い世界を描き出している。これが，"The Eve of St. Agnes"「聖アグネス祭の夕べ」の中においては月の光の中で祈る乙女の姿を更に壮絶に浮き彫りにされている。ついでに海の波については，

; as when heav'd anew
Old ocean rolls a lengthened wave to the shore,
Down whose green back the short-liv'd foam, all hoar,
Burst gradual, with a wayward indolence.
(II. ll. 347—350)

波をもり上げ新しく
太古の海がころがして伸びたる波を岸辺に運ぶ，
緑の背にはうたかたの白い小さな泡立てて
気ままな怠惰で，順次に砕く。

太古の海が長い波を岸辺に打ち寄せているがその緑の波の背に白いあわを一瞬たてて，白い波頭を気ままなものぐさで打ち壊している。一見した写実的な世界だが緑と白とが入りまじり，波のうねりの動作もよく出ている。聴覚的にも

Wide sea, that one continuous murmur breeds
Along the pebbled shore of memory!
(II. ll. 16—17)

広い海，絶えることなきざわめきが
記憶の小石の浜に生む！

浜辺に打ち寄せる波が，小石に当ってざーと洗い流していくように，記憶の中でもいつまでもざわめきが響いている印象をみごとにとらえている。あるいはまた音としてアシ笛の響きが出てくる。

And through whole solemn hours dost sit, and hearken
The dreary melody of bedded reeds—
(I. ll. 238—39)

壮厳な祈りのうちに坐していて，耳を傾けききすます
岸辺のアシの佗しい歌に，

といった川床に生えているアシが風に吹かれてそよいでいるのを聴いている風景は田園的 (pastoral) で，"Ode on a Grecian Urn" の世界にも凝縮されているのを思い起こす。更に静寂の中にも，天球の霊妙な音楽を聴くといっている。

; to his capable ears
Silence was music from the holy spheres;
(II. ll. 674—5)

彼の耳には聴えてくる
静寂こそが霊妙な天球からの音楽だ。

こうした聴覚的に研ぎ澄まされた世界から，視覚的な世界に移り，光としても色としてもイメージ的に残像を与えてくれる。朝のイメージとして，

Now while the silent workings of the dawn
Were busiest, (I. ll. 107—8)

今や夜明けの静かな営み
その営みの忙がしさ

と曙の明けていく様の刻々に変っていくのを巧みに言っており，更に

; and the dew
Had taken fairy phantasies to strew
Daisies upon the sacred sward last eve,
And so the dawned light in pomp recieve.
For 'twas the morn: Apollo's upward fire
Made every eastern cloud a silvery pyre
Of brightness so unsullied, (I. ll. 91—7)

夕べ，夜露が
雛菊を聖なる芝に撒き散らした
妖精みたいな気まぐれで，
夜明けの光を華やかにそんな風に浴びていた
何故なら今は朝だから。昇るアポロの火の玉が
東の雲をけがれなき輝く銀の薪にした。

露が芝生に雛菊をまいたように輝かせ，昇る太陽をアポロ神にたとえて，その広い肩を地球の端から昇らせる様は壮大である。

I, who still saw the horizontal sun
Heave his broad shoulder o'er the edge of the world,
Out-facing Lucifer, (I. ll. 529—31)

私はじっと見ていた地平の太陽
広き肩をばもり上げてこの世の端の上に出る，
明けの明星にらみつけ。

そしてしののめの空の雲をたき木にして白銀の光を放っている様は光鮮やかである。朝のイメージと反対に，夕星(ずつ)＝宵の明星も一点の光として輝いている。

The good-night blush of eve was waning slow,

And Vesper, risen star, began to throe
In the dusk heavens silverly, when they
Thus sprang direct towards the Galaxy.
(IV. ll. 484—7)

夕べの別れの赤らみが次第に薄くなってゆき，
昇る夕星(ずつ)波うち放つ
おぼろな空に白銀を，その時星々
飛び立った，銀河をさして真直ぐに。

かわいいイメージとしては，ホタルの飛び交う光がすーと走っていくのが目に残る。

And, while beneath the evening's sleepy frown
Glow-worms began to trim their starry lamps,
(II. ll. 140—1)

夕べの眠むげなしかめづら，
ホタルが芯を切り出した，星のようなるかれらのランプに。

最後にキーツの象徴的な花として，ケシの花を挙げる。後の "Ode to a Nightingale"「ナイチンゲールに寄する賦」の

My heart aches, and a drowsy numbness pains
My sense, as though of hemlock I had drunk,
Or emptied some dull opiate to the drains
....
(I. ll. 1—3)

我が心痛みぬ，眠けを催す痺れこそ
我が感覚の痛みなり，毒にんじんを飲んだごと
だるさ催すアヘン剤，澱(おり)まで飲んだごとくして，

を思い起させる花である。ここでは赤いケシが魔術をもたらすものとしている。

There blossom'd suddenly a magic bed
Of sacred ditamy, and poppies red:

(I. ll. 554—6)

突然魔法の花壇が咲き出した
聖なるハッカと赤いケシ。

更には眠気を催すような花であって色々な幻想を綾なす花であるとしている。

Moreover, through the dancing poppies stole
A breeze, most softly lulling to my soul;
And shaping visions all about my sight
Of colours, wing, and bursts of spangly light;
(I. ll. 566—9)

更にまた，ケシの花びら揺れる中
そよ風忍び柔らかく私の心を眠らせた。
目には夢幻が形をなす
色とか翼，あふれきらめく光など。

そして，どこか重い気分を残す花でもある。

—for lo! the poppies hung
Dew-dabbled on their stalks, the ouzel sung
A heavy ditty, and the sullen day
Had chidden herald Hesperus away,
With leaden looks: (I. ll. 682—6)

見よ！　ケシの花茎にも露をはねかけて
頭を重く垂れている。ツグミは歌う
重い歌，むっつりした日が
追いやった。伝令官の夕星(ずつ)を
鉛色した顔つきで。

あるいは，

Like sorrow came upon me, heavier still,
Than when I wander'd from the poppy hill:
(I. ll. 913—4)

私に悲しみ来たごとく，ケシの丘から
散歩して，帰って来たより重くなる。

こういったケシの花はいつもキーツの心の中にあったと言える。アヘン剤を飲んだように幻想を生んでくれるものとして，赤い繊細な花が風に揺れて，キーツの心を誘惑していた。ケシは夢幻の中に倦怠をもたらすものであったが，キーツは醒めた鋭い感覚の内にあったといえる。

以上具体的に自然を通して，視覚的，聴覚的に捉えられたものを挙げてみた。美しい映像を残すのは，こうした自然の一つ一つであって，心に訴えるものが如何にして表現されているかどうかである。象徴的にしか心の映像を写し出すことができないと言ってもよい。

結　び

幸福論で言う intensity を俟って，幸福の度合は視覚から聴覚へ，聴覚から愛へと温度計 (Thermometer) の目盛が上げられた。結局は想像力のもつ合一性に帰せられると言ってよい。対象と合体融合することが幸福への道である。詩は合体融合から生れた世界を浮び上らせることが重要である。映像の世界のうちに美が捉えられているからである。"Endymion" は月への賛美でもあった。具体的な一つの月を通して様々な色合いを写し出してくれた。「美しいものが永遠の喜びである」には想像力の世界を通して，合一への道を辿っていかなければならない。

註

1) Endymion, A Poetic Romance. Book I, l. 1
2) Ode on a Grecian Urn. V, l. 9
3) Ode on Melancholy. III, l. 1
4) 英語青年 July, 1975—June, 1976. 小川和夫
5)
Wherein lies happiness? In that which becks 777
Our ready minds to fellowship divine,
A fellowship with essence; till we shine,
Full alchemiz'd, and free of space. Behold 780

The clear religion of heaven! Fold
A rose leaf round thy finger's taperness,
And soothe thy lips: hist, when the airy stress
Of music's kiss impregnates the free winds,
And with a sympathetic touch unbinds 785
Aeolian magic from their lucid wombs:
Then old songs waken from enclouded tombs,
Old ditties sigh above their father's grave;
Ghosts of melodious prophecyings rave
Round every spot where trod Apollo's foot; 790
Bronze clarions awake, and faintly bruit,
Where long ago a giant battle was;
And, from the turf, a lullaby doth pass
In every place where infant Orpheus slept.
Feel we these things?—that moment have we stept 795
Into a sort of oneness, and our state
Is like a floating spirit's. But there are
Richer entanglements, enthralments far
More self-destroying, leading, by degrees,
To the chief intensity: the crown of these 800
Is made of love and friendship, and sits high
Upon the forehead of humanity.
All its more ponderous and bulky worth
Is friendship, whence there ever issues forth
A steady splendour; but at the tip-top, 805
There hangs by unseen film, an orbed drop
Of light, and that is love: its influence,
Thrown in our eyes, genders a novel sense,
At which we start and fret; till in the end,
Melting into its radiance, we blend 810
Mingle, and so become a part of it,—
Nor with aught else can our souls interknit
So wingedly: when we combine therewith,
Life's self is nourish'd by its proper pith,
And we are nurtured like a pelican brood. 815

(BK. I. 777—815)

6） 小川和夫：Wherein Lies Happiness. 英語青年，Sept. 1975.

7） 参照，Endymion: Takeshi Saito, (Kenkyusha, 1964) p. 161.

8） Not that the 'allegorical' significance is unimportant. On the contrary, though it is probably a mistake to see *Endymion* as a consciously worked-out allegory, the under-surface meaning of some parts of the opem is of great interest, for in them we find further exploration of the tentions which we have observed to be dominating him. (from *John Keats* by Robin Mayhead. Cambridge, U. P., 1967 p. 28)

9） 井島　勉：美学（創文社，昭和49年）p. 106.

10)

, O where
Hast thou a symbol of her golden hair ?
Not oat-sheaves drooping in the western sun; 610
Not—thy soft hand, fair sister ! let me shun
Such follying before thee—yet she had,
And they were simply gordian'd up and braided,
Leaving, in naked comeliness, unshaded,
Her pearl-round ears, white neck, and orbed brow;
The which were blended in, I know not how,
With such a paradise of lips and eyes,
Blush-tinted cheeks, half smiles, and faintest sighs,
That, when I think thereon, my spirit clings 620
And plays about its fancy, till the stings
Of human neighbourhood envenom all.
Unto what awful power shall I call ?
To what high fane ?—Ah ! see her hovering feet,
More bluely vein'd, more soft, more whitely sweet
Than those of sea-born Venus, when she rose
From out her cradle shell. The wind out-blows
Her scaf into a fluttering pavillion;
'Tis blue, and over-spangled with a million
Of little eyes, as though thou wert to shed, 630
Over the darkest, lushest blue-bell bed,
Handfuls of daisies.' (I, ll. 608—632)

ああどこに
大地よ，彼女〔月の女神〕の金髪の象徴があるのか言ってくれ。
西空の太陽に頭を垂れる燕麦の束でもない

美しい妹〔Peona〕よ！　お前の柔らかい手でもない。
お前の前でこんな愚かしいことを言うのはよそう。
だがしかし，素晴らしい髪をしていた。
そしてこざっぱりと髪を結いあげていたので，蔭にならず，
真珠のような丸い耳と，白い首と，三日月形の眉とが
露にも，みめよく現われていた。何故か分らぬが
それらは楽園のような唇と目と
紅く染った頬と、ほのかな微笑と，微かな溜息とが入り混じって，
そのことを考えると，私の心はその空想と絡みあい戯れて，
やがては全てが人間の隣りに住む毒針に毒〔苦痛〕を注がれてしまうのだ。
どんな壮厳なる力に呼びかけようか。
どんな高い神殿に呼びかけようか。ああ，彼女の舞うような脚を見よ。
海から生れたヴィーナスが，揺り籠の貝の中から
立ち上った時のあの脚よりも更に青々とした静脈を，
更に柔らかい，更に美しい脚を(見よ)。
風が彼女のスカーフを翻して
ひらめく天蓋のようにした。
それは青い無数の小さな目がきらめいているようで，
あなた〔Peona〕があたかも濃紺のブルー・ベルの
花壇にたくさんの雛菊の花を蒔き散らしたかのようだった。

参 考 文 献

1. Text: Keats, Poetical Works, ed. H. W. Garrod. (Oxf. U. P., 1972)
2. Text: Endymion, A Poetic Romance. By Takeshi Saito. (Kenkyusha. 1964)
3. Amy Lowell: John Keats. Vol. 1 (1969)
4. Robin Mayhead: John Keats. (Cambridge, U. P., 1967)
5. Mario L. D'Avanzo: Keats's metaphors for the poetic imagination. (Duke U. P. 1967)
6. Aileen ward: John Keats, The making of a Poet. (Mercury Books, 1966)
7. W. J. Bate: Keats, A Collection of Critical Esseys. (A spectrum Book. Prentice-Hall, Inc. 1964)
8. M. J. Bate: John Keats. (Oxford U. P., 1967)
9. Ed. Miliam Allott: Keats, The Complete Poems. (Longman, 1970)
10. B. Ifor Evans: Keats. (Folcroft Lib. Ed. 1974)
11. Ed. Robert Gittings: Letters of John Keats. (Oxford Paperbacks, 1975)
12. Takeshi Saito: Keats' View of Poetry. (Cobden-Sanderson Ltd. 1929)

13. 松浦　暢：キーツ—その夢と現実—（吾妻書房，S. 54）
14. 高橋雄四郎：キーツ研究，自我の変容と理想主義（北星堂書店，1977）
15. 小川和夫：Wherein Lies Happiness.（研究社，英語青年，July，1975—June，1976）
16. 小川和夫：「キーツの手紙—詮索的な読み方」（「成蹊大学文学部紀要」第10号）
17. 井島　勉：美学（創文社，S. 49）
18. Ed. T. Hutchinson: The Complete Poetical Works of Percy Bysshe Shelley. (Oxford U. P. 1961)